

第30回 平日の午後のコンサート

2023.7.6(木) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Thu. July 6, 2023, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

第18回 渋谷の午後のコンサート

2023.7.9(日) 14:00開演 Bunkamura オーチャードホール
Sun. July 9, 2023, 14:00 at Bunkamura Orchard Hall

〈コバケン・クライマックス〉 (Kobaken Climax)

指揮とお話 小林研一郎 Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

〈7/6〉ピアノ 中川優芽花* Yumeka Nakagawa, piano ※当初の発表から変更となりました。

〈7/9〉ヴァイオリン 服部百音* Moné Hattori, violin

コンサートマスター 三浦章宏 Akihiro Miura, concertmaster

チャイコフスキー：戯劇『エフゲニー・オネーギン』より ポロネーズ(約5分)
Tchaikovsky: Polonaise from opera "Eugene Onegin" (ca. 5 min)

〈7/6〉チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番より第1楽章* (約22分)
Tchaikovsky: 1st movement from Piano Concerto No. 1 (ca. 22 min)

〈7/9〉チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲より第1楽章* (約19分)
Tchaikovsky: 1st movement from Violin Concerto (ca. 19 min)

— 休憩 intermission —

チャイコフスキー：交響曲第4番より第1楽章(約19分)
Tchaikovsky: 1st movement from Symphony No. 4 (ca. 19 min)

チャイコフスキー：交響曲第6番『悲愴』より第2楽章(約9分)
Tchaikovsky: 2nd movement from Symphony No. 6 (ca. 9 min)

チャイコフスキー：交響曲第5番より第4楽章(約12分)
Tchaikovsky: 4th movement from Symphony No. 5 (ca. 12 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra 協力：Bunkamura (7/9)

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために / Dear audience

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール



©山本倫子

指揮とお話 **小林研一郎**

Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

東京藝術大学作曲科、及び指揮科の両科を卒業。1974年 第1回ブタペスト国際指揮者コンクール第1位、及び特別賞を受賞。2002年ブラハの春音楽祭では東洋人初のオープニング『わが祖国』を指揮して万雷の拍手を浴びた。

これまでにハンガリー国立フィル、チェコ・フィル、アーネム・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、フランス国立放送フィル、ローマ・サンタ・チェチーリア国立管、ロンドン・フィル、ハンガリー放送響、N響、読響、日本フィル、都響等の名立たるオーケストラと共演を重ね、数多くのポジションを歴任。

ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功勞勲章(同国で最高位)等、国内では旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞等を受賞。

2005年、社会貢献を目的としたオーケストラ「コバケンとその仲間たちオーケストラ」を設立、以来全国にて活動が続いている。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル・名古屋フィル・群響桂冠指揮者、読売日響特別客演指揮者、九響名誉客演指揮者、東京藝術大学・東京音楽大学・リスト音楽院名誉教授、ローム ミュージック ファンデーション評議員等を務める。

公式ホームページ: <http://www.it-japan.co.jp/kobaken/>

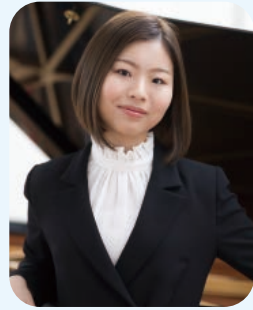
〈7/6〉

ピアノ 中川優芽花

Yumeka Nakagawa, piano

現在21歳、ドイツに生まれ育った日本人ピアニスト。2021年、スイスで開催された権威あるクララ・ハスキル国際ピアノ・コンクールで優勝、および聴衆賞ほかも併せて獲得して以降注目を浴びている。2014年にドイツ連邦青少年音楽コンクールで満点を獲得して優勝を果たし、同年ワイマルの若いピアニストの為のフランツ・リスト国際コンクールで第2位を獲得。近年ではデュッセルドルフのロベルト・シューマン国際コンクール(2019)およびイエネ・タカチ国際コンクールにも優勝。

クリスティアン・ツァハリアスの指揮の下ベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番やモーツァルトの2台のピアノのための協奏曲KV365をはじめとしてオーケストラとの共演の機会も増え、ヴェルビエ音楽祭にアカデミー生として出演。現在ワイマルのフランツ・リスト音楽大学においてグリゴリー・グルズマン教授のもと研鑽を積んでいて、公益財団法人ロームミュージックファンデーションから支援を受けている。



〈7/9〉

ヴァイオリン 服部百音

Moné Hattori, violin

5歳よりヴァイオリンを始め、8歳でオーケストラと初共演。2009年にリピンスキ・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールで史上最年少第1位、その後も多数の国際コンクールでグランプリを受賞。2017年に新日鉄住金音楽賞、岩谷時子賞、18年にアリオン桐朋音楽賞、服部真二音楽賞、2020年にホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞を受賞。現在はN響、読響、東フィル、東響、日フィルをはじめとする数々の著名オーケストラ、指揮者と共演し国内外で演奏活動を行っている。現在、桐朋学園大学音楽学部大学院に在籍。使用楽器は日本ヴァイオリンより特別貸与のガールネリ・デル・ジェス。

オフィシャルウェブサイトは<https://www.mone-violin.com/>



©YUJI HORI

プログラム・ノート

解説=飯尾洋一

| マエストロ「コバケン」の十八番チャイコフスキー！

本日のマエストロは「コバケン」の愛称で親しまれる小林研一郎。情熱あふれる指揮でオーケストラを燃え上がらせることから「炎のマエストロ」の異名でも知られる巨匠です。音楽を通じて人々に喜びを与えるエネルギーは、80代を迎えた今もお尽きることがありません。

そんなマエストロが得意とする作曲家がチャイコフスキー。チャイコフスキーの音楽が持つ熱いドラマを客席の隅々まで伝えてくれることでしょう。

今回演奏されるのは、いずれもチャイコフスキーの代表作ばかり。管弦楽曲における「ザ・ベスト・オブ・チャイコフスキー」と呼んでもおかしくありません。そして、交響曲や協奏曲を全楽章聴くのではなく、各曲のハイライトとでもいべき楽章を選んで「コバケン・クライマックス」と題してお届けいたします。すべての曲がクライマックスです。



マエストロ・コバケンのもと、東京フィルが熱いクライマックスを奏でます

歌劇『エフゲニー・オネーギン』より ポロネーズ

ピョートル・チャイコフスキー(1840-1893)は、主に管弦楽曲や協奏曲で知られていますが、実はオペラにも相当な力を注ぎました。『エフゲニー・オネーギン』は、11作書かれたオペラの中で、『スペードの女王』と並ぶ代表作。交響曲第4番やヴァイオリン協奏曲と同じ1878年に完成され、翌79年3月モスクワで初演された、通算5作目のオペラ(チャイコフスキー自身は「抒情的場面」と呼んでいます)です。「田舎娘タチヤーナの純愛を退けたオネーギンは、数年経って公爵夫人となった彼女に恋心を抱くも、時すでに遅し…」といった全3幕の物語。「ポロネーズ」は第3幕冒頭の公爵家の舞踏会の場面で演奏される壮麗なオーケストラ音楽です。ファンファーレに続いて、ポーランドの緩やかな3拍子の民族舞曲ポロネーズを用いた堂々たる音楽が展開され、貴族の華麗な世界が表現されます。(柴田克彦)



チャイコフスキーはしばしばイタリアやスイス、フランスなど西欧各地を旅行しました ©stock.adobe.com

〈7/6〉アメリカで成功収めた雄大なピアノ協奏曲

1874年、チャイコフスキーは**ピアノ協奏曲第1番**の作曲に取り組みます。当初、初演者には盟友ニコライ・ルビンシテインを予定していました。ところがルビンシテインは作品を酷評します。「ありきたりで低俗」「ほとんどのページを書き直すか、捨てる必要がある」。チャイコフスキーは憤然として、「一音たりとも書き直すつもりはない」と答えました。

代わって初演を買って出たのは、国際的な名声を誇る名ピアニスト兼指揮者のハンス・フォン・ビューロー。彼は「すべてのピアニストに感謝されるだろう」と作品を称賛し、アメリカ・ツアーで演奏することを決めます。ボストンでの世界初演は大成功。やがてアメリカでの評判がヨーロッパにも伝わって、チャイコフスキーの名声を高めることになりました。



ハンス・フォン・
ビューロー

全3楽章のなかで、もっとも有名なのが**第1楽章**のアレグロ・ノン・トロppo・エ・モルト・マエストロ。決然とした冒頭部分がよく知られています。華麗な独奏ピアノとオーケストラが競いあうかのようにして、雄大な楽想をくりひろげます。

〈7/9〉現在でももっとも有名なヴァイオリン協奏曲のひとつ

1878年、スイスに滞在していたチャイコフスキーのもとを、若いヴァイオリニストのヨシフ・コーテクが訪れます。その際、コーテクが土産として持参した楽譜のひとつがラロ作曲の「スペイン交響曲」。独奏ヴァイオリンが活躍するこの曲を知って大いに創作意欲を刺激されたチャイコフスキーは、**ヴァイオリン協奏曲**の作曲に着手します。着想からスケッチの完成まではわずか12日間。独奏ヴァイオリンの技法についてはコーテクの助言が取り入れられました。

作曲は順調に進んだものの、初演は物議を醸しました。アドルフ・ブロッキの独奏によりウィーンで初演したところ、聴衆からの野次と批評家たちからの酷評で迎えられたのです。これには音楽の伝統を誇るウィーンの人々の新興国ロシアに対する偏見もあったのでしょうか。初演こそ不評でしたが、次第に作品は評価を高め、現在ではもっとも人気の高いヴァイオリン協奏曲のひとつと

なっています。

第1楽章はアレグロ・モデラートーモデラート・アッサイ。短い序奏に続いて独奏ヴァイオリンが情感豊かなメロディを奏でます。華やかなヴァイオリンの技巧を伴って、起伏に富んだ楽想が展開されます。



ヨシフ・コーテク(左)とチャイコフスキー

「運命の超克」をテーマにした屈指の力作

チャイコフスキーには長期にわたって経済的な支援をしてくれるパトロンがいました。鉄道王の夫より多額の財産を相続したメック夫人は、チャイコフスキーの音楽を深く敬愛し、作曲家が創作活動に専念できるようにと14年にもわたって援助を続けます。これによりチャイコフスキーはモスクワ音楽院の教授職を辞め、思うがままに作曲に打ち込むことができたのです。奇妙なことに、ふたりは生涯に700通以上もの手紙を交わしながら、一度も直接会おうとしませんでした。

1878年に初演された**交響曲第4番**は、経済的支援に対する感謝を含めて、メック夫人に献呈されています。

第1楽章は、アンダンテ・ソステヌートーモデラート・コン・アニマ。チャイコフスキーがメック夫人に記した手紙によれば、冒頭の重厚なファンファーレは、「運命。幸福の実現を妨げる不吉な力」。運命の超克が作品の中心的なテーマになっています。

悲壮な交響曲の、ほっと一息つける第2楽章

チャイコフスキーが生涯の最後に書いた作品が**交響曲第6番『悲愴』**。作曲者が世を去ったのは初演のわずか9日後でした。

1893年、チャイコフスキーは友人であるロシア大公コンスタンチンからレクイエム(死者のためのミサ曲)の作曲を勧められます。しかし、チャイコフスキーは「いま書いている交響曲にはレクイエムの気分があふれている」と答えます。後にこの「悲愴」のリハーサルに立ち会ったコンスタンチンは、「まさしくこれはレクイエムだ」と言い、涙を浮かべながら作曲者の手を握ったと伝えられます。

作品は全4楽章からなります。**第2楽章**のアレグロ・コン・グラツィアは、悲劇的なこの作品のなかで、ほっと一息つけるような楽章かもしれません。曲は珍しい5拍子によるワルツで始まります。中間部では暗い予感が漂いますが、ふたたびワルツが帰ってきます。

運命との闘い、勝利のフィナーレ

1888年、チャイコフスキーは10年ぶりとなる新作交響曲、**第5番**を書きあげます。作曲にあたって採用されたのは、ひとつのモチーフが全曲に有機的な結びつきをもたらすというアイディア。第1楽章冒頭のほの暗い「運命のモチーフ」が全楽章にわたって姿を見せ、闘争的な音楽を経た末に、最後にこのモチーフを明るい調子で高らかに演奏し、勝利を表現します。

しばしば自作に対して自信を持てなかったチャイコフスキーは、この曲が失敗作ではないかという疑念にとらわれ、一時は「第5番を火に投げこむつもりでした」といいます。しかし、名指揮者アルトゥール・ニキシュによる演奏が成功を収めると、ようやく作品の価値に確信を持てるようになりました。

第4楽章はフィナーレ：アンダンテ・マエストーゾ。弦楽器による「運命の



弟のイボリトが借りていたタガンログの邸宅。チャイコフスキーは1886年、1888年、1890年の3回滞在した

©stock.adobe.com

モチーフ」で開始された後、エネルギッシュな楽想がくりひろげられ、祝祭感あふれる終結部へと向かいます。

いいお・よういち(音楽ジャーナリスト)／著書に『クラシック音楽のトリセツ』(SB新書)、『R40のクラシック』(廣済堂新書)、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修(朝日新聞出版)、『クラシックBOOK』(三笠書房)他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。